

Multifactorial analysis on the short-term side effects occurring within 96 hours after radioiodine-131 therapy for differentiated thyroid carcinoma

著者	Kita Tamotsu
著者別名	喜多, 保
journal or publication title	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
volume	平成17年7月
page range	11-11
year	2005-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/15881">http://hdl.handle.net/2297/15881</a>

学位授与番号	甲第 1644 号
学位授与年月日	平成 16 年 9 月 30 日
氏 名	喜 多 保
学位論文題目	Multifactorial analysis on the short-term side effects occurring within 96 hours after radioiodine-131 therapy for differentiated thyroid carcinoma (甲状腺分化癌に対する放射性ヨード 131 内用療法後 96 時間以内に発現する短期副作用の多変量解析)
論文審査委員	主 査 教 授 松 井 修 副 査 教 授 森 厚 文 教 授 橋 本 琢 磨

### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

放射性ヨード 131 内用療法は甲状腺全摘術後の甲状腺分化癌患者に対して適用され、その再発予防・転移巣治療に有効である。内用療法には、消化器症状などの短期副作用が伴うことが知られているが、その発現に関わる因子を統計学的手法で明らかにした報告は皆無である。本研究は、多変量解析によって短期副作用発現に最も関与する因子を抽出し、副作用低減につながる情報を得ることを目的とした。

甲状腺全摘術後に放射性ヨード 131 内用療法を受けた 71 名の甲状腺分化癌患者において、ヨード内服後 96 時間以内に発現した副作用の種類と発現頻度をレトロスペクティブに検討した。多変量解析因子は、体重当たりの放射性ヨード投与量、治療直前の TSH 値、放射性ヨードの有効半減期、性別、年齢、投与後 3 日目のシンチグラムにおける胃あるいは唾液腺への放射性ヨード集積の有無、および放射性ヨード投与前の浮腫の有無である。ヨード内服後の急性胃腸炎の予防として、全ての患者に制吐剤（ドンペリドン）を投与し、急性唾液腺炎の軽減のために酸味の強い食物摂取を指導した。得られた結果は以下の如くであった。

短期副作用としては、制吐剤の投与にも拘わらず消化器症状 (65.2%) が最も多く発現し、次いで唾液腺の腫脹と疼痛 (50.0%)、味覚障害 (9.8%)、頭痛 (4.4%) がみられた。消化器症状には食欲低下 (60.9%)、吐き気 (40.2%)、嘔吐 (7.6%) が含まれ、その発現頻度は、放射性ヨード投与量が 55.5 MBq/kg を越えると有意に増加した。また治療直前の TSH 値が高値であるほど消化器症状の発現が有意に増加した。嘔吐については、130.0 MBq/kg を越えると有意に頻度が増加した。唾液腺の腫脹と疼痛の発現頻度は、有意に女性で高かった。味覚障害、頭痛の発現に関係する有意な因子は認められなかった。

以上より、最も発現頻度の高かった消化器症状には、体重当たりの放射性ヨード投与量と治療直前の TSH 値が密接に関与することが、確固たる証拠をもって明らかにされた。また、ドンペリドンの予防的投与を施行したにもかかわらず、高頻度に消化器症状が出現したことから、より作用の強力な制吐剤の選択が必要であることが示された。本研究結果は、放射性ヨード 131 内用療法に伴う短期副作用低減、ひいては医療の質向上に直結する点において、学位に値する労作であると評価された。